

News Letter

STS Network Japan

Vol.10, No.1 (1999)

夏の学校のお知らせ	p2
代表就任あいさつ 中村征樹	p3
STS NETWORK JAPAN 99年春のシンポジウム 「グローバル・サイエンス、ナショナル・サイエンス、 ローカル・サイエンス」報告	p4
STS Network Japan Yearbook・論文投稿規定	p6
第2回コンセンサス会議の準備状況	p8
S T S 情報	p9
事務局便り	
総会報告	p12
人事、会計報告	p13

STSは、Science, Technology,
and Society の略称です。

'99夏の学校 「人文社会科学とSTS」

参加者募集中！

期間	1999年 7月 24日 (土) ~ 26日 (月)
会場	関西地区大学セミナーハウス (神戸市北区道場字ロクゴ318-2 電話 078-985-4391) アクセス: JR福知山線(宝塚線)三田駅下車 神戸電鉄有馬温泉駅行きバス平田バス停下車 徒歩15分 JR福知山線(宝塚線)道場駅下車 徒歩30分(ハイキングコース) 神戸電鉄有馬温泉駅下車 三田行きバス平田バス停下車 徒歩15分 (送迎バスあります。時間は後日お知らせします)
予算	¥13,000程度 (一泊、二食で¥6,500程度。後日正式にお知らせします)

'99「夏の学校」のテーマは「人文社会科学とSTS」となっております。しかし、このタイトルから導き出されるイメージは各人により千差万別なことでしょう。今回の夏の学校では、以下の二つの方向性からプログラムを組み立てていく方針です。

まず第一に、近代国家を語る上でその存在を無視できない社会科学に対するSTSを考えてみるという切り口、すなわち、自然科学に対するのと同じように社会科学に関してもthird opinion を提示していきようにしよう、という観点からのSTSの可能性を検討します。

第二に、STSは科学技術に対する人文社会学的研究のひとつであるという観点から、人文社会科学とSTSが互いから何を学ぶうかについて方向性を探ります。社会科学(社会学・政治学・経済学・法学など)・歴史・文学・哲学など従来の人文社会科学的領域からSTSが何を学び、また、それらの領域にこれから何を提示していけるのかを考えます。

人間の知がどのように科学・技術・社会をめぐる問題に関わってきたのか、人間の知がどのように科学・技術・社会をめぐる問題系社会に関わってきたのか、そしてその中でSTSはどのような役割を果たしていけるのか。これを機会に幅広い議論と多様な価値観の出会いが行われる場を提供したいと思っています。

去年に引き続き今回もSTSNJ会員の塚原東吾氏にご尽力いただき、関西地区大学セミナーハウスで開催することになりました。申し込みスケジュールなどは、下記の通りとなっています。皆様奮ってご参加ください。

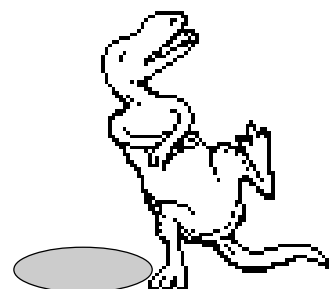
- 1) 発表者(とテーマ)受付 締め切り6月15日
(とりあえず資料だけ欲しいという方は、この日までに申込書の「プログラムを送って下さい」に丸をつけて送って下さい)
- 2) 参加最終締め切り7月1日 (発表のない方はこの日までであれば参加可能です)
- 3) 参加申し込みは右ページのものをご利用になるか、同様の書式をご送付下さい。

問い合わせ先

STSNJ夏の学校実行委員長 隠岐さや香
E-MAIL Okisayaka@aol.com

申し込み先

STS NETWORK JAPAN 事務局
〒182 東京都調布市調布ヶ丘1-5-1
電気通信大学情報システム学研究所
小林信一研究室気付
TEL/FAX 0424-43-5666



代表就任あいさつ

中村 征樹

(東京大学大学院博士課程・日本学術振興会特別研究員)

STS Network Japanも、来年の3月には、早くも結成10周年を迎えようとしています。そのようななかで、STSを取り巻く状況は、いま、大きな転換点に差し掛かっているように思われます。たとえば、省庁レベルでも、STSに関わるいくつかのプロジェクトが動き出しているという話を聞いています。また、STS国際会議の日本における再度の開催に向けて、準備が着々と進行しているということでもあります。そのような形で、9年前には想像もつかなかったような急ペースで、STSに対する世間からの関心が大きく高まっていることが実感させられるところです。だからこそ、そのような期待に応えるためにも、STSというものの内容的な発展というものを大きく押し進めていく必要があるのではないのでしょうか。今回、代表を引き受けさせていただくにあたって、そのための場=ネットワークを作り出していくことに多少なりとも貢献できたら、と思っています。

そのためにもとりわけ、STSNJへの新規参入者の大幅な拡大というものを実現していくことが非常に重要な点であると考えています。たとえば、私たちとは他の領域で/異なったアプローチから、STS的な諸問題を検討している人たちとの交流を押し進めていくこと、そしてまた、若手の参加を拡充していくこと、そのことは、STSの議論を大きく活性化していく上で不可欠なことに思われます。それは、STS Network Japanがその名の通り、"Network"としての働きを担っていく上で、なによりも肝要な点ではないのでしょうか。そのための試みとして、たとえば今年の夏の学校では、そのような交流を目的としたテーマ設定や、新規参加者を念頭に置いたプログラムの作成にも配慮しながら、準備を進めているところです。

前任者の平川さんのようなパワフルな活躍はできないかと思いますが、その分、「若手」の連携のもと、STSNJの更なる発展に微力なりとも貢献できるよう、努力する所存です。至らない点多々あるかと思いますが、今後とも、何卒、よろしく願いいたします。

----- 切り取り線 -----

STS NETWORK JAPAN夏の学校 参加申込み用紙

STS NETWORK JAPAN夏の学校'99 (に参加します。 / のプログラムを送って下さい) *

氏名(フリガナ) _____ 性別(男・女) *

連絡先(所属先・自宅・Eメール) *

Eメールアドレス(_____)

所属先 _____

〒

Tel. - - Fax. - -

自宅住所: 〒

Tel. - - Fax. - -

参加日程 [7月__日の__時頃、[_____]駅/車で]に到着予定です)

宿泊・食事* 宿泊[24日 25日] 食事[24日夕 25日朝 25日夕 26日朝]

発表(する・しない) *

発表される方のみ 講演題目(_____)

* をつけて下さい。

複数必要な方はコピーしてお使い下さい。Eメールでの申込みも同様の書式でお願いします。

99 STS Network Japan 春のシンポジウム

「グローバル・サイエンス、 ナショナル・サイエンス、 ローカル・サイエンス」

開催報告

水沢光(東京工業大学)

<プログラム>(敬称略)

司会:隠岐さや香(東京大学総合文化研究科)

(はじめに)

春日匠(京都大学人間・環境研究科)

「科学の地政学的位置について:プロレタリア科学、マイノリティー科学、サバルタン科学-」

(パネラーの講演)

隅蔵康一(東京大学先端科学技術センター)

「特許と国家:国家戦略は世界に貢献できるか?」

橋本毅彦(東京大学先端科学技術センター)

「原爆開発と戦後の科学:罪、責任、危険、希望」

鬼頭秀一(東京農工大)

「技術における普遍性とローカルティ

:生命技術と生態工学の可能性を巡って」

平川秀幸(ICU大学院)

「グローバルサイエンスは可能か

:生物多様性条約における知識のポリティクス」

(総合討論)

3月28日(日)に、東京工業大学石川台1号館において、STS Network Japanの春のシンポジウムが開催された。参加者は発表者を含めて40名弱だった。以下、簡単に報告する。

まず春日匠氏が、問題提起として、「我が国の繁栄のための科学」、「地球のための科学」という言葉を取り上げた。こうした言葉は当然のように使われているが、その意味にはっきりとしたコンセンサスがない現状を明らかにし、これらが互いに矛盾しないものなのか、また、何を示しているのかを問うた。

また、春日匠氏は、「科学の地政学的位置について:プロレタリア科学、マイノリティー科学、サバルタン科学」と題して、科学の受益者はだれかという視点から、プロレタリア科学、マイノリティー科学、サバルタン科学という3つの理念系を提示した。プロレタリア科学では、プロレタリア全体が利益を享受できる単一の科学が想定される。これに対し、マイノリティー科学では、様々なグループを擁護する様々な科学が考えられる。また、二重の抑圧を受けるサバルタンの問題も取り上げた。

続いてパネラーの講演が行なわれた。まず、隅蔵康一氏が「特許と国家:国家戦略は世界に貢献できるか?」と題して講演した。科学の世界では、学生でも研究結果さえ出せば、英語でジャーナルに投稿できる。こう考えると、科学はサムシング・ニューイズムで国境の無い、グローバル・サイエンスに思える。ではどこの国の科学研究でもよいのだろうか。現実には、自国の科学技術を発展させることが、当然の目標とされている事実を隅蔵氏は提示する。国家経済の発展に貢献するためだ。これはまさに、本シンポジウムのいうナショナル・サイエンスだろう。そして研究成果がいかにお金になるかということ、特許を通してである。現在アメリカは、特許を広範囲に認めるプロパテント政策のもとで国家戦略的にバイオ研究を行ない、世界のヘルスケアを支配しようとしていると、隅蔵氏は指摘する。特定技術分野の一国のみによる支配は、急に特許料が上がり、十分な医療を提供できなくなるなどの危険性をはらむ。日本がアメリカに対抗して、国家戦略的にバイオ研究を行なうことは、リスクヘッジという意味で、国益と同時に世界にも貢献する。また、現在の国ごとの特許制度を変え、世界共通特許を定めようという考えがある。しかし、ヘルスケアなど人間生活に必須の特許が特定の国に押さえられている現状を考えると、途上国がアンチパテント政策で技術へのアクセスを維持できるオプションを残しておいた方がいいという時の備えになることを隅蔵氏は明らかにした。

ついで、アメリカのバイオ産業の形成と発展について述べ、その環境要因として、多数のベンチャー企業の存在、非独占的で適切なライセンス条件、産学の技術移転を促進する環境をあげた。最後に、日本の新規産業創出に関して、これまで大学独自の技術移転機関というものがなく、大学教官の個人ベースでの努力に頼っていた状況を示すと同時に、現在、TLOの設置を計画・検討している大学が増えていることを述べた。また、問題点として、各大学の発明委員会に抛る発明の帰属判断が迅速でない、技術移転機関に抛る発明の掌握が容易でない、技術移転に携わる人材の不足、大学研究者のベンチャー企業設立に対するハードルが高いことをあげ、それぞれ具体的な解決策を提示した。

ついで、橋本毅彦氏が「原爆開発と戦後の科学-罪、責任、危険、希望-」と題して、いやでもグローバルな影響を持たざるを得ない、科学者の活動の責任について、科学的立場から講演した。話は、物理学者の藤永茂氏が『世界』に書いた論文とからめ、原爆開発に携わった科学者に焦点を絞って進んだ。オープンハイマーは戦後、「科学者は罪を知った」とコメントした。これと対照的に、コナントは罪を拒絶する立場をとった。また、テラーは核開発に関する研究に熱中し、その重要性をまわりに説く、ある意味で研究に没頭する科学者の典型だった。シラードは目が利き、社会的行動力があり、「戦後人々への警告のために使用するべきである」「純粋に倫理的配慮から控えるべき」など相矛盾しながらも自分の見解を精力的に訴えた。「科学者の社会的責任」については、「原子力の開発は今までと

違うという責任論」「専門外で適切な発言、行動が取れない」「将来の可能性に関し洞察できる」などの意見があったことを、橋本氏は明らかにした。

休憩をはさんで、第二部はまず、鬼頭秀一氏が「技術における普遍性とローカリティ:生命技術と生態工学の可能性を巡って」と題し、ローカルな場での事例に対して、科学・技術の専門家がどうかかわるかという問題を提起した。そしてこの問題に対し、生命技術と生態工学という2つの事例を通して考察した。生命技術とは、多様な生命過程を統一性の視点から考える試みである。地域に根差した形で行われていた、在来型の農業に対し、生命技術を用いる近代農業は、普遍的な原理の下に行われる。この典型が「緑の革命」だったのだが、これは地域の様々なネットワークを切断してしまった。また、その担い手は、科学者、技術者という専門家であり、今までの農業の担い手だった地域の人々は排除され、支配されることになってしまったと指摘する。そして、農業技術の担い手とは同時に、文化の担い手でもあった。鬼頭氏は「緑の革命」の反省から何を学ぶべきかを問うた。

生態工学とは従来の土木工学を見直し、生態学の知識も導入した工学である。生態系という視点が新しい価値を創造するのか、単に生態系をも含めた徹底的な管理という方向に向かうのかという問題があるという。技術の担い手が地域住民から専門家へ移るのも心配だ。鬼頭氏は、こうした問題を諫早湾、霞ヶ浦などの事例をあげながら、説明した。最後に、自然の地域的特性を考えざる得なかった「伝統技術」と、自然の制約条件を克服したと考えた「近代技術」におけるローカリティの捉え方の違いを明らかにした。今後の新しい技術として、自然の地域的特性を意識的に取り上げ、活用する技術を提案した。そして、技術を考える時に、専門家だけで発見できる「唯一解」が、具体的なローカルな場にさえも無いと述べ、当事者たちの参加による形成の必要性を訴えた。

最後に、平川秀幸氏が「グローバルサイエンスは可能か:生物多様性条約における知識のポリティクス」と題して講演した。1992年採択、翌年発効した生物多様性条約は、生物多様性と遺伝資源の持続可能な利用から生じる利益の公正かつ衡平な配分を目的としたものだ。生物多様性条約における南北対立は、生物特許をめぐるもので、アメリカは条約は産業活性化と利益保護を阻害するとして当初は署名を拒否し、現在も批准していない。途上国からはバイオテクノロジーと生物特許がもたらさうする社会的・生態的リスクへの批判があるという。同種の種子ばかりを使う均一化によるリスクの増大は同時に、農家の自立的経営基盤の破壊をも意味する。ここで見られる対立は、「先進国のナショナルな利益のグローバルな追求と、途上国のローカルな利益の対立」「バイオテクノロジー+生物特許と、土着地域の社会秩序と知識の対立」「過剰介入ゆえに成功する知識と、無知ゆえの非過剰介入ゆえに成功する知識の対立」という構造を示す。平川氏は、科学技術が孕むリスク要因として、知識の増大に伴う際限のない社会的・自然的世界への介入、分子生物学を使わない知識の特許取得からの排除、バイオテクノロジーへの根拠のない信頼を提示し

た。また、単にナショナルな利益だけでない、グローバルな科学の条件として、ローカルな参加型実践、それを可能にする技術を生み出す新たなインセンティブ、従来の特許制度とは異なる知識保護システムの構築の必要性を訴えた。同時に、これらの実現のための努力を日本に求めた。

パネラーの講演の後、フロアを交えて活発な討論がなされた。講演内容は生物系の話が多かったため、ここでの議論がその外の分野、コンピュータ・インターネット・自動車等の近代的移動手段などで、どの程度適用できるのかという議論もあった。グローバル、ローカルという用語自体の捉え方が、人によって様々であるため、議論はやや散漫な印象を受けた。同様、ここでのサイエンスという言葉も、どこまでを指すのかあいまいで違和感を覚えた。ともあれ、サムシング・ニューイズムの科学から土着の知識まで、知識を支える様々なあり方を、考えさせられたシンポジウムであった。講演者はもとより、企画運営にあたった全ての方々に感謝の意を示したいと思う。ご苦労様でした。

STS Network Japan 公式ホームページ

97年度の総会での決定を受けて、STS Network Japanの公式ホームページが開設されました。

会員に向けた活動計画の迅速な告知と、非会員への活動内容の宣伝が当面の目標です。当面は、NLに掲載された記事などは極力掲載する予定です。NLに投稿される方は、あらかじめご了承下さい。

方針は、今年度末の総会で継続することが決定しました。今後とも、みなさまのご意見、ご批判をなるべく多くいただければと考えています。

なお、当面管理は広報担当の春日がおこないます。

ご意見は、事務局あるいは春日までいただければ幸いです。

URL<<http://kob.is.uec.ac.jp/~sts/>>

広報 春日 匠<skasuga@mars.dti.ne.jp>

STS Network Japan Yearbook・論文投稿規定

STS Network Japanでは、Yearbook'99（1999年度刊行予定）に収録する投稿論文を募集いたします。前回同様、必ずしもアカデミックな基準にこだわらず、読んで面白いオリジナリティーにあふれた論文を求めます。一定の水準を保ったものであることは前提条件ですが、萌芽的な研究のアイデアを大胆にまとめたもの、教育の実践報告なども受け付けます。この趣旨にしたがって、総説論文や、レビュー論文などは掲載いたしません。

なお、Yearbook'99の投稿締切は、1999年7月31日です。ふるってご投稿をお願いします。

STS Yearbook論文編集委員会(1999年1月15日現在)

編集顧問	村上陽一郎（国際基督教大学教授）
委員長	小林信一（電気通信大学助教授）
副委員長	中島秀人（東京工業大学助教授）
委員	小川正賢（茨城大学助教授）
	柴田 清（新日本製鉄先端技術研究所）
	調麻佐志（信州大学助教授）

A.投稿の資格

- a-1 少なくとも1名、STS Network Japanの会員（会費を払っている人）を著者として含むこと。また、非会員の共著者を含む場合、その共著者すべてが、STS Network Japanの精神を尊重すること。
- a-2 投稿は無料です。

B.原稿の審査

- b-1 投稿論文の審査は、論文編集委員会が責任をもって行ないます。委員、もしくは委員会が適当と認める査読者によって原稿を検討し、掲載の可否を決定します。
- b-2 論文編集委員会は、必要に応じて著者に論文の修正を求めることがあります。
- b-3 論文編集委員は、STS Network Japanの総会の議決によって選出します。
- b-4 原稿は必ずワードプロセッサを使用して作成し、下記のあて先にお送り下さい。提出していただくのは、原稿のA4サイズのプリントアウト、図版等、各5部です。原稿の控えのフロッピーは、必ず著者の手元に残して下さい。
- b-5 掲載が決定されましたら、原稿を収めたフロッピーディスクと最終的なプリントアウトを一部お送りいただきます。編集の都合上、Mac OS, Windows 95または98,MS-DOSのいずれかのテキストファイル（特殊な記号を使用せずどのワープロソフトでも読めるいわゆるASCIIファイル）をご準備ください。図版は、写真製版できる形にして別にお送りください。

C.執筆要項

- c-1 原稿は横書きとし、原則として使用言語は日本語とします。それ以外の場合には、事前にご相談ください。
- c-2 原稿の分量は、原則として400字詰め原稿用紙40枚相当の長さを最大とします。この長さには、注、図版等を含みます。なお、図版はA4サイズ1枚（刷り上がりサイズ）につき原稿用紙3枚に換算してください。
- c-3 原稿の冒頭には、表題、著作者名、著作者の所属とこれらの英訳、およびキーワード（5語以内で日本語を原則とする）を記してください。なお、キーワードは検索の便宜を図るためのものです。
- c-4 原稿末尾には英文要約（300語以内）を付けることをお勧めします。これは、原稿の枚数には含めません。
- c-5 単行本、雑誌の題名は、和漢語の場合は『』に入れ、欧文書籍の場合にはイタリック体としてください。論文の題名は、和漢語の場合には「」、欧語の場合には‘ ’の中に入れてください。
- c-6 注は本文の中に挿入箇所を算用数字で示し、原稿の最後にまとめて記してください。
- c-7 注で引用する文献は、書籍の場合原則として次のような順序で記載してください。著者名、（編・訳者名）、表題、（欧文書籍の場合は出版地）、出版社名、出版年、引用ページ数（ - ページ、欧文においてはpp. - ）。

例：柴田鉄治『科学報道』、朝日新聞社、1994年、18ページ。

I.ウォーラステイン、川北稔訳『近代世界システム』、名古屋大学出版会、1993年、161-187ページ。

David Aubrey, Oliver Lawson-Dick (ed.), Brief Lives, London, Mandarin Books, 1992, pp. 27-31.

c-8 論文からの引用の場合は、著者名、表題、雑誌（書籍）名、巻、刊行年、引用ページの順に記載してください。

例：山田太郎「若者の自然科学に対する意識」、『日本物理学会誌』、67(1998)、23-24ページ。

John Mulkay, 'Hope and Fear for Science', Social Studies of Science, 28(1999), pp. 1-8.

c-9同一の文献を再度引用する場合には、下記を参考に表記して下さい。同一著者の同一年の複数の文献を引用している場合には、a,bなどで区別して下さい。なお、どれがa,bなどに該当するかは、最初の引用の際に定めて下さい。

例：山田太郎（1998年）、18ページ

Aubrey (1992), p. 15.

Mulkay (1999a), pp. 211-212.

c-10 適当な漢字表記のない外国の地名や外国人名はカタカナで記し、（ ）の中に原綴をおさめてください。なお、これはあくまでも原則ですので、不明の場合にはお問い合わせ下さい。

c-11 最終的な原稿（掲載決定後）では、イタリック体の指定は下線を、ボールド体の指定は下波線を、赤色のボールペン等で記入してください。

c-12 年号の表記は原則として西暦としますが、西暦以外の年号を使用する場合には、1976（昭和51）年のように、西暦に続けてカッコ内に示してください。

c-13 図版はそのまま写真製版できるものを用意し、挿入箇所がはっきりと分かるように示してください。なお、著作権上図版の使用許諾が必要な場合には、原稿の執筆者が原典の著作者からあらかじめ許諾を得てください。

D.著作権の帰属

d-1 掲載原稿の著作権は、STS Network Japanに帰属します。ただし、著作者の人格権に所属する部分は、著作者に留保されます。

d-2 Yearbookの掲載原稿の別刷は作成しませんが、著者に限り、著者の関与した部分の複製を20部まで自由に作成することができます（共著者がいる場合には、著者数×15部までで最大50部を超えないこと）。

E.原稿の送り先・問い合わせ先等

e-1 〒177 東京都練馬区関町南1-2-24 中島秀人

（投稿原稿であることが分かるように、封筒に明記してください）。

tel 03-3928-9217 /e-mail MAG02214@niftyserve.or.jp

e-2 Yearbook '98論文投稿締切 1999年7月31日 消印有効。

STS-NETの閉鎖とメーリングリストへの移行のお知らせ

総会の決定を受けてNIFTYのパティオを利用していたSTS-NETは閉鎖することになりました。

今後は会員のみ参加いただけるSTSNJメーリングリストをたちあげます。登録を希望されるかたは、調（shirabe@cinfnt.shinshu-u.ac.jp）までメールをお送りください。「手動」で登録いたします。

第2回コンセンサス会議の準備状況

「科学技術への市民参加」研究会では、昨年の「遺伝子治療を考える市民の会議」に引き続き、「高度情報社会 特にインターネットを考える市民の会議（コンセンサス会議）」を準備している。

2月27日に専門家を招いての課題研究を行った。
現在、市民パネルの募集を行っている。

コンセンサス会議は十数名の一般市民（市民パネル）が、議題とする科学技術について各分野の専門家の説明などを聞いた上で討論を行い、コンセンサス（合意）を得ようとするもの。つまり、市民の日常生活から意見や提案をまとめる会議方式。

この方式は、1980年代後半にデンマークで市民によるテクノロジー・アセスメントの一つとして生まれた。90年代に入り、オランダ、イギリス、ニュージーランド、アメリカなどで試みられ、昨年は日本の試みの他、フランス、スイス、韓国などでも試みられるなど、世界的に注目されている。私たちの会議開催の目的は、コンセンサス会議という試みを通じ、「日本的」な、あるいは「日本において可能」な科学技術への市民参加の方法を探ることである。

市民パネル募集要項

(1) 募集人数：10数名（18歳以上）。ご応募頂いた方の中から、年代、性別など、さまざまな立場の方に参加して頂けるよう、選ばせていただきます。

(2) 今回のテーマ：高度情報社会 特にインターネット

(3) 会場：東京電機大学理工学部（東上線・池袋から50分、高坂から学バス・東武バスで10分）

(4) 応募して頂きたい方：このテーマについて興味を持ち、討論してみようと考えられる方。コンピュータ、インターネットを使っていることは条件ではありません。むしろ使っていない方こそ、ご応募下さい。

(5) 会合予定 5月29日、6月12日、7月24日、7月31日、9月4日（いずれも土曜日、午前11時から午後5時まで）

(6) 応募申込・問い合わせ先：ご応募は住所、氏名、電話番号をお書き添えの上、葉書、ファクシミリまたは電子メールで下記までお申し込み下さい。4月下旬まで。

〒350-0394 埼玉県比企郡鳩山町石坂

東京電機大学理工学部
若松征男

編集委員からのお願い

会員の皆様には、各種情報をお寄せくださるようお願いいたします。

特に、会員の皆様の関わられた出版物、報告書の情報をお知らせください。また、会員消息の項目も充実させたいと思っておりますので、お知らせください。今回も多数の方々から情報を提供していただきました。ご協力どうも有り難うございました。

なお、情報は、事務局宛あるいは、skasuga@mars.dti.ne.jpまでお送りくださいますようお願い申し上げます。

<編集委員・春日 匠>

会費納入について

このニュースレターが入っていた封筒のラベルに関する説明

お名前の右下に、会費の支払い状況などを示しております。例えば、

「98,99未」と「99未」は、それぞれ該当年の会費（3500円）が支払われていないことを表します。前者に該当の方は、今年度中に会費のお支払いがなければ、それをもって脱会の意志表明と受け取らせていただき、以後Newsletterの発送を中止します。

「9 9不足」は、お支払いいただいている会費が3500円には不足しているもので、「不足」の後の数時が不足金額を表わします。お手数ですが差額分お支払いください。

「臨時」は、「夏の学校」への参加者など、何らかの理由でSTS Network Japanに関係がある方に、臨時にお送りするものです。この期間は通常1年間ですので、送付が始まって1年以内に入会の手続きをとられなければ、以後Newsletterの送付を停止させていただきます。

S T S 情報

開催状況

東工大中島研究室公開セミナー「先端科学技術と社会」第29回研究会

科学技術の高度化は、それを受容する社会との間に、数々の解決すべき課題を提起しています。月例セミナー「先端科学技術と社会」では、先端科学技術と社会に関わる刺激的な話題の提供者を毎回お招きし、年間10回のペースで研究会を開催しています。

例会の第29回は、設計論・インタフェース論がご専門で、著書「消えゆくコンピュータ」を発表され、音楽評論家としても知られる久保田先生にご登場いただきます。ふるってご参加ください。なお、通常と会場の教室が異なります。終了後、懇親会を開催いたします。

日時 1999年4月20日(火) 午後17:30-
内容 久保田晃弘(多摩美術大学)
「電子楽器の身体性 アフォーダンス以降の
インタフェース・デザイン論」
会場 東京工業大学大岡山キャンパス
石川台4号館地階セミナー室

科学・技術と社会の会のご案内(114th)

今回は、清野聡子氏をお招きし、話題を提供していただきます。清野聡子氏は、廣野喜幸氏・堂前雅史氏と共著で、話題の『科学』(岩波書店、1999年3月)創刊800号記念特集「いま、科学の何が問われているのか」に興味深い論文を寄稿されています。

あらかじめお読みいただくと当日より深い議論ができるのではないかと思います。

なお、本研究会はオープンなものですので、ご関心をお持ちの方がいらっしゃれば、お誘い合わせのうえふるってご参加ください。

日時:1999年5月6日(木) 6:00PM~8:00PM
場所:〒113-0033 文京区本郷 7-3-1

東京大学社会科学研究所 1F 中会議室
話題提供者:清野 聡子氏・廣野 喜幸氏・堂前 雅史氏
テーマ:「生態工学は河川を救えるか?
- 環境的転換に起因する社会・科学・技術
のさまざまな相克 -」

*入会ご希望の方は、下記事務局まで、お名前、住所、電子メール・アドレス、所属、関心領域をお寄せください。転居なさった場合も、事務局へご連絡ください。

*1999年度年会費3000円を納入された会員の方には、年報『科学・技術・社会』第8巻(1999年7月刊行予定)を送料無料で出版社より直接お手元にお送りさせていただきます

ます。
科学・技術と社会の会事務局
柿原 泰(E-mail: kakihara.yasushi@nifty.ne.jp)

会員の出版物

「科学」800号記念特集号「いま、科学の何が問われているのか」(1999年3月号)

1931年、寺田寅彦、石原純氏らによって創刊されて以来、「科学」は通巻800号を迎えました

巻頭言 市民との不安を共有する 高木仁三郎
科学の目 ガンマ線嵐が地球を急襲! インフラ科学の
すすめ 佐藤文隆

リサーチ “コンセンサス会議”という実験 素人に科学
技術の評価する資格はあるか(小林傳司)/SSCと大型
装置科学の現在(平田光司)

フォーラム わが国の科学技術予算における問題点 和田
昭允

Plus ultra 野獣のように振る舞う天使 長谷川真理子
科学者は何をしたいのか、科学者に何が問われているのか
(第1回)

・脳の科学が意味するもの(彦坂興秀)/健康な生存のため
の“メタ科学”(黒田洋一郎)/量子統計力学の原理を
検証する(和達三樹)/うらやましい科学者(石川
統)/科学はどう“役に立つ”のか(伊藤啓)
“特集:いま、科学の何が問われているのか”

<座談会>科学はいまどこにいるのか 科学者と科学史家
が語り合う 上野健爾・佐々木力・佐藤文隆・山田慶兒
・核の政治学 戦後科学技術史の原点としての原爆投下
佐々木力

・生態工学は河川を救えるか 科学技術と社会の新たな関
係を求めて 廣野喜幸 清野聡子 堂前雅史

・リスク社会における科学と政治の条件 “対抗的科学”
の構築に向けて 平川秀幸

・環境の文化政治学に向けて 金森 修
・ダイオキシンの科学社会学入門 松崎早苗

・遺伝子の技術と社会 “限界が示す問い”と“可能性が
開く問い” 立岩真也

・なぜメディアは科学を批判的に解読する必要があるのか
“善玉・悪玉コレステ

ロール”言説はなぜ広まったか 松山圭子
・中西医結合医療の理論 経験と理論に基づく技術とは
清水宏幸

・地震学や火山学は、なぜ防災・減災に十分役立たないの
か 低頻度大規模自然災

害に対する“文化”を構築しよう 小山真人
・地震と原子力、そしてエネルギーの未来 情報公開と専
門家の役割・市民の役割 野村元成

・市民のための科学と科学技術基本法 上田昌文
書 評 高木仁三郎:市民の科学をめざして(小出昭一
郎)/白木博次:冒される日本人の脳(片平洸彦)/鶴浦

裕：進化論を拒む人々（林真理）

科学時事 視覚情報は視床でも統合されている / 移入哺乳類への緊急対応を

定価1400円（税込）. 通常号 + 68ページの大増号です . 1999年2月25日発売（小社在庫日）. ご注文は全国書店・大学生協へ
郵送（送料108円）は“岩波ブックオーダー”電話03-3222-5184へお申し込み下さい .

（代金は、雑誌到着後の郵便振替またはカードでお支払い願います .）

メールでのご注文は、kagaku@iwanami.co.jpへ

『科学史・科学哲学』第14号のご案内

『科学史・科学哲学』の最新号が特別増頁号『IDOLA A』として刊行されました。『ドクサ』から数えて通算18号の既刊はかけがえのない財産ですが、そこにもう一冊加えられるのはうれしいかぎりです。一本、また一本というあじわいをもった論考があつまってきて、いつのまにか20本にもなっていました。

B5版段組 184ページです。ご購入いただける方は定価2300円（送料込）を郵便振替（加入者名：科学史・科学哲学刊行会、00190-5-56115）にてお申し込みください。部数に限りがありますので、お早めにお申し込みください。

巻末にはバックナンバーのご案内もあります。

<目次>

- 【大森荘蔵先生追悼】野矢 茂樹 回想
【村上陽一郎先生退官】小林 傳司 「大学改革」に巻き込まれて - 村上陽一郎先生を送る -
【特集一 消滅の科学史・消滅の科学哲学】
川田 勝 「科学と宗教の対立」の消滅
篠田 真理子 <フンボルティアン・サイエンス>の終焉をめぐって - 「地球を把握する科学」という理想 -
加藤 茂生 植民地における科学技術の歴史叙述について
金杉 武司 質と心身問題 - 「感覚質の消去」は何を消去したのか？ -
法野谷 俊哉 種の限界と死という悪
【特集二 人類学の政治学】
坂野 徹 人類学者と近代日本 - 回顧と展望：近代日本人類学史 -
金森 修 知識政治学による人類学の再分節化に向けて
坂元 ひろ子 書評：フランク・ディクター 『性・文化・モダニティ』
【論文】
岡本 拓司 1995年の電気事業法改正の背景 - 電力需要・電力供給の問題点とその打開策 -
染谷 昌義 色の現象学 - WHILHELM SCHAPPの『知覚の現象学のために』研究 -
高橋 秀裕 ニュートンの数学思想 - 流率論の形成を中心に -
林知宏 ライプニッツの数学思想形成における無限小概念

【IDOLA PICTURES】

- 東慎一郎 数学的自然科学の哲学的基礎づけをめぐって
- アリストテレス、トマス、デカルト -
中村征樹 技術的実践の政治学にむけて
- 革命期フランスの技師と画法幾何学 -
柿原泰 「通史」というアポリア
- テッサ・モーリス = 鈴木の日本技術史を読む
村上 祐子 論理学教育：インディアナ大学の場合
家田 貴子 イギリスの科学社会学における理論と実証
- SPRUでの留学経験から -
信原 幸弘 書評：アンディ・クラーク 『認知の微視的構造』
〒153-8902 目黒区駒場 3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科
科学史・科学哲学研究室内 科学史・科学哲学刊行会
(柿原 泰)

文献情報

納富信留氏より

この度、私のケンブリッジでの研究成果が単行本、The Unity of Plato's 'Sophist' - Between the Sophist and the Philosopher - (Cambridge Classical Studies, Cambridge University Press, 1999)として出版されました。約350頁、ハードカバーで、定価は40ポンドです。

これは、プラトン後期の代表作『ソピステース』篇の全体を哲学の問題として位置づけ解釈するという専門研究書で、「哲学」とは自己の「内なるソフィスト」との絶えざる対決によって成立するという基本ヴィジョンによってまとめられています。具体的には、「現れappearance」「像image」「虚偽falsehood」といった問題が扱われ、「対話dialogue」や「ディアレクティケー-dialectic」の理念が探究されています。

ギリシア語はほとんどすべてローマ字化されており、英語は平明です。プラトンやこの対話篇の基礎知識が必要で（岩波全集には翻訳あり）、どなたでもお読みいただけるというものでは有りませんが、哲学やプラトンにご興味があるかたに御薦めいただけたらとお願い致します。

中島秀人氏より

- ・マーガレット・エスピーナス著、横家恭介訳『ロバート・フック』（国文社、1999年）3600円+税
う、私の宿敵??実はこの本は、ロバート・フックについての英語圏の唯一の伝記で、1956年の出版。私の本でも言及しましたが、フックの日記の分析などに特に優れている著作。当時の研究レベルの制約はありますが、フック評価の流れの先鞭をつけたものとしてお薦めいたします。
・歌田明弘『マルチメディアの巨人・ヴァーネヴァー・ブッシュ、原爆・コンピュータ・UFO』（ジャストシステム、1996年）、1800円。

川崎勝氏より

『科学が作られているとき』の日本語版序文でも言及されていたラトゥールの最新刊『パンドラの希望』が刊行されました。

Bruno Latour, Pandora's Hope: Essays on the Reality of Science Studies, Harvard U. P., 1999.

Contents

1. "Do You Believe in Reality?"
News from Trenches of the Science Wars
2. Circulating Reference
Sampling the Soil in the Amazon Forest
3. Science's Blood Flow
An Example from Joliot's Scientific Intelligence
4. From Fabrication to Reality
Pasteur and his Lactic Acid Ferment
5. The Historicity of Things
Where were Microbes before Pasteur
6. A Collective of Human and Nonhuman
Following Daedalus's Labyrinth
7. The Invention of the Science Wars
The Settlement of Socrates and Calicles
8. A Politics Freed from Science
The Body Compolitic
9. The Slight Surprise of Action
Facts, Fetishes, Factishes

Conclusion

What Contrivance Will Free Pandora's Hope

Glossary

梶雅範氏より

95年に刊行された敗戦から70年代までを扱った4巻（別巻1）に続いて80年から95年を扱う巻が刊行されたそうです。

分売せず、9月末までは76000円（税別）と高価ですが。もしかしたら、このSTSNetworkの関係者の中にも執筆者がいらっしゃるのでは。よければ執筆作業の苦労話などお聞かせください。

『[通史]日本の科学技術[国際期]1980-1995』全2巻・別巻1

編集代表 中山茂、編集 後藤邦夫・吉岡斉、学陽書房

5-I 国際期 総論

第1部 日本の科学技術の台頭と国際化

第2部 冷戦終結のインパクト

第3部 ハイテク社会の基盤形成

第4部 産業と科学技術

5-II

第5部 学術研究と高等教育の変貌

第6部 コンピュータ社会の到来

第7部 価値多元化社会の科学技術

第8部 生命と医療

第9部 市民生活と科学技術

・アフマド・Y・アルハサン、ドナルド・R・ヒル『イスラム技術の歴史』大東文化大学現代アジア研究所監修、多田博一、原隆一、斉藤美津子共訳、平凡社、1999年3月20日、4200円（税別）。

平凡社には技術史クラシックスという貴重な翻訳書シリーズがありますが、その新刊です。

8世紀から14世紀までのイスラムの技術的成果を概観する入門的な本を目指したということです。

序

2 機械工学

3 建築と土木技術

4 軍事技術

5 船舶と航海術

6 化学技術

7 織物、紙、皮革

8 農業と食品技術

9 採鉱と冶金

10 技術者と職人

11 エピローグ

・『科学史技術史の諸問題』

, no.1, 1999

ロシアでの唯一の科学史技術史に関する季刊の定期学術雑誌です。ロシア科学アカデミー科学史技術史研究所（モスクワ）編集。本号は1999年2月18日印刷、1000部発行。巻末に英語の目次と論文の簡単な英文レジュメがつくほかは本文はすべてロシア語です。

柿原泰氏より

・吉岡 斉『原子力の社会史 - その日本的展開』（朝日新聞社、1999年4月）

・庄司興吉編『世界社会と社会運動 - 現代社会と社会理論：総体性と個性との媒介』（梓出版社、1999年4月）

小川慎一「相対主義が科学技術社会学にもたらした意義」という科学社会学の論稿に1章をさいた論文集で、著者から献本いただいたこともあり、紹介します。

他には、「情報社会における社会運動のイメージ - シリコンバレーの経験から」（矢澤修次郎）、「社会変動のコード論的モデル - 社会システム理論の視角から」（赤堀三郎）、「世界システム論」関連論文や「実践」概念、「非暴力」論、「大衆社会論」などが扱われています。

事務局だより

総会報告

第7回 総会が去る4月26日、東京工業大学本館H111教室にて開かれました。
プログラムは以下の通りです。

(1) '98年度事業として、以下の事項が報告されました

- ・ 夏の学校 7月18日(土)~7月20日(月)「STSの未来」(於 東海大学山中湖セミナーハウス)
- ・ シンポジウム 98年10月31日(土)「医療問題は科学論として語れるか」
- ・ シンポジウム 99年3月28日(日)
「グローバル・サイエンス、ナショナル・サイエンス、ローカル・サイエンス」
- ・ 研究発表会 98年3月27日(土) 3件
- ・ Year Book刊行
- ・ News Letter発行 3回

(2) '98年度会計報告

右のページ参照

(3) 事務局新人事

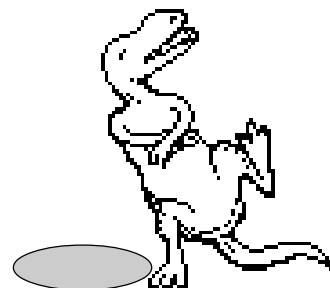
右のページ参照

(4) '99年度事業計画として以下の事項が承認されました

- ・ 夏の学校 (実行委員長隠岐さや香, 副委員長中村征樹) 「人文社会科学とSTS」
- ・ シンポジウム 1999年秋, 2000年春
- ・ News Letter 4回発行
- ・ Year Book発刊
- ・ 名簿改訂 (ニューズレターに同封)

(5) 承認事項

- ・ NIFTYを利用していた"STS-NET"を閉鎖し、メーリングリストに移行します。
運営は信州大学の調研究室で行います。
- ・ STSNJ 公式Web Siteについて、以下の事項の継続が承認されました。
暫定公開していたSTSNJ Web Siteを、広報用のWeb Siteとして公式公開します。
ニューズレター記事は原則転載します。



98年度事務局人事

代表	中村 征樹
事務局長（兼任）	中村 征樹
会計	平川 秀幸
会計監査	上野 啓祐
広報・庶務（兼任）	春日 匠
夏の学校実行委員長	隠岐さや香
文書掛	大辻 永

1998年度 会計報告

（単位は¥）

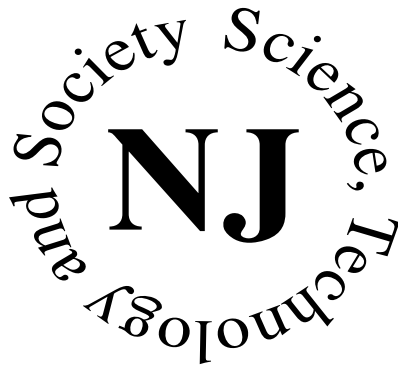
1) 収入

前年度繰越金	351,134
会費	242,000
Year Book売上	64,000
STSNET残預金	28,045
計	685,179

2) 支出

NewsLetter発送費	139,646
YearBook印刷費	338,040
事務局経費	8,643
京都シンポジウム経費	64,997
STSNET開設費	6,000
計	557,326

次年度繰越金	127,853
計	685,179



編集後記

また一年、広報、ニューズレターの編集等を担当させていただくことになりました。
いたらぬ点もあるかと思いますが、よろしくお願ひします。
夏の学校のこともあるため、とりあえず今回はさくっとした内容です。
夏の学校の日程は次号でお知らせしますが、その時私はフィールドワーク先からの編集になりそうです。
さあ、うまく連携プレーができるでしょうか。乞うご期待！

K.S.

Newsletter Vol.10, No.1 (通巻No.34)
1999年5月1日発行

編集

STS NETWORK JAPAN 事務局
Newsletter編集委員会

代表 中村 征樹 / 委員 春日 匠

発行

STS NETWORK JAPAN
代表 中村 征樹

STS NETWORK JAPAN 事務局

〒182 東京都調布市調布ヶ丘1-5-1

電気通信大学情報システム学研究科

小林信一研究室気付

TEL/FAX 0424-43-5666

E-mail: sts@kob.is.uec.ac.jp

郵便振替口座 00170-1-63708

加入者名 STS NETWORK JAPAN